

昭和25年2月10日第3種郵便物認可 平成26年2月1日発行（毎月1回1日発行） 第97巻第2号 ISSN 1341-6669

月刊福祉

2

FEBRUARY

Monthly
Welfare
2014

特集

社会保障制度改革のゆくえ





比嘉正子地域貢献事業研修センターひまわりネット

所在地	大阪市都島区都島本通3-16-8
電話	06-6925-1304
ホームページ	http://miyakojima.or.jp/
開設年月	2011年9月(2013年9月、現住所に移転・リニューアル)
事業内容	・ひまわりネット(子育て・障害・介護等に関する相談) ・地域住民への啓発、広報活動 ・育児・障害・介護・生活者支援活動 ・社会福祉ボランティアの育成 ・福祉人材バンク ・災害復興支援活動 いね!物産展。



都島友の会の看護師が講師となって、お母さんたちに伝えるベビーマッサージ講習会

談に来てよかったと思っていただけで、うにすること。そして私たちだけでは解決できない問題は、関係機関につないでゆく。それが、活動の基本です」(岡本さん)

ふたりとも、同法人が運営する保育園の園長として長年活躍してきた。そして、定年退職後の新たな仕事として、「ひまわりネット」の相談員になることを、渡久地歌子理事長から強く勧められたという。

「これまでも、児童福祉施設や高齢者

施設などの施設内に相談窓口を設けて、さまざまな相談を受けてきましたが、施設の仕事もしながらでは時間的にも無理があります。相談する側も、子どもが通う保育園には直接相談しにくい、子どもが卒園した後は、どこに相談すればいいかわからないという方もいます。そんな方々の窓口になれるのは、心理学の専門家より、保育士として地域の子どもや親たちと接してきた経験をもつ彼女たちだと思ったのです」と渡久地理事長。

「どこに相談すればいいのか、そんな悩みを抱える人たちに気軽に足を運んでもらえるよう、『話しにおいて』『お茶飲みにおいて』と声をかけ、皆さんをお迎えするようにしています」(村上さん)

「コミュニティワーカーによる全人的ケアをめざす」

同法人のアドバイザー的役割を務める元花園大学大学院教授の門脇光也さんは言う。

「渡久地理事長は、岡本さんと村上さんに、地域を視野に入れた『コミュニティワーカー』になってほしいと考えたのです。そして、『ひまわりネット』を軸に、地域で暮らす、すべての人々の全人的ケアをめざしています。真の地域福祉を実現するためには、施設にいる時だけではいけない。例えば、保育園に通っている子どもたちの家庭環境を含めて、ケアをしないと全人的な育成にはならない。実は、その考え方は、半世紀前に比嘉先生が気づき、先駆的に取り組んできたことでした」

例えば、乳児保育、障害児保育、放



実践 1

地域福祉の明日を担って

大阪府◎社会福祉法人都島友の会 比嘉正子地域貢献事業研修センター ひまわりネット

「ひまわりネット」は、社会福祉法人都島友の会が、2011年に創立80周年記念事業のひとつとして開設した、子育て・障害・介護なんでも相談室。2013年9月、地域とともに歩み、地域に貢献する社会福祉活動を実践する「比嘉正子地域貢献事業研修センター」のスタートを機に、その前線部隊としてより広いスペースへ移転・リニューアルし、取り組みをさらに進化させつつある。



ひまわりネットでは、どんな相談でも受け付ける

「話しにおいて」「お茶飲みにおいて」
ここは街の誰もが来られる相談室

大阪市都島。この街には、戦前戦後にわたって、その生涯を地域福祉にささげたひとりの女性の思いが息づいている。その人の名は、比嘉正子(ひがまきこ)(1992)。社会福祉法人都島友の会の創設者だ。戦前、いち早く、この地に青空保育園を開設して以来、「ゆりかごから墓場まで」を目標に掲げ、保育園から高齢者施設の運営まで、福祉全般に取

り組み、文字通り、地域のすべての人のケアを追求し続けた。

その志を受け継ぎ、創設80周年の節目の年にあたる2011年9月に開設したのが「ひまわりネット」だ。基本となる業務は、子育て・障害・介護などあらゆる相談にのることだ。

「社会福祉制度では対応しきれない状況にある人、その狭間にいる人に手を差し伸べることが、そもそもの『ひまわりネット』開設の目的です。子育て、親の介護、障害のある子どものこと、さらには虐待、

ひきこもりなど、さまざまな悩みや問題の相談にのり、解決の一助となる地域とともに歩み続ける社会福祉法人としての使命であると考えたからです」(本部事務局長・寄瀬博光さん)

その活動を中心となって担うのが、ひまわりネット相談員の岡本和江さん(おかもとわづな)と村上明子さんだ。

「心の病で子育てが困難な方や、子どもが不登校で行き詰まってしまった親子など、ありとあらゆる悩みや思いを抱えている人がいます。そうした方々に、相



「地域福祉とは、命を守ること」 比嘉正子の志を明日へつなぐ

社会福祉法人 都島友の会

理事長 渡久地 歌子さん
本部事務局長 寄瀬 博光さん
元花園大学大学院教授 門脇 光也さん

渡久地さん、寄瀬さん、門脇さんの「ひまわりネット」にかける熱い思いの原点は、創設者・比嘉正子さんの志にある。渡久地さんは語る。「日本は豊かになり、昔に比べれば福祉行政も整ってきています。でも、制度の狭間で、社会の片隅で、問題を抱え、迷い、苦しんでいる人がいます。豊かな時代だからこそ、制度の枠組みではとらえきれない新たな問題も噴出しています。この都島という地域に、比嘉先生が福祉の種をまいて82年。1931年の青空保育園の開設から始まったさまざまな取り組みは、地域の子どもから高齢者まですべての人の命を守る活動でもありました。私たち都島友の会は、その志を大切に活動していききたい。そして、社会福祉法人として、そうした命題に答えを出していくための見通す力を身につけていきたいと思います」。ひまわりネットは、そのために必要不可欠な活動なのだ。



前列左から渡久地さん、門脇さん、寄瀬さん。後列左からひまわりネット相談員の岡本さん、村上さん

「ひまわりネット」では、「地域の福祉資源を有効活用し、各専門機関と連携をとりながら、『もつと広く・もつと丁寧・もつとたくさん』をスローガンに貢献すること」を事業目標に掲げている。「そのためには、聞き出すことが大事。こちらからおうかがいして、お話を聞くことも少なくありません。1時間、2時間とお話をしていくうちに、『実は……』という本音が出てくる。一所懸命に話を

をとりながら、『もつと広く・もつと丁寧・もつとたくさん』をスローガンに貢献すること」を事業目標に掲げている。「そのためには、聞き出すことが大事。こちらからおうかがいして、お話を聞くことも少なくありません。1時間、2時間とお話をしていくうちに、『実は……』という本音が出てくる。一所懸命に話を

聞いてみると、こちらにも涙が出てきます。今、何をすべきなのか、そのことに一つひとつ丁寧に向き合うことが大事だと思います」（村上さん）

「ひまわりネット」があるからこそ、地域とともに歩む社会福祉法人として何をすべきかもみえてくる。

「福祉は、すべての人が健康で文化的かつ快適な生活が守られ、豊かな人間生活が実現できることを内包するものでなければならぬ」。かつて、そう語った比嘉正子さんの思いをかなえるべく、都島友の会の前線部隊として活動する「比嘉正子地域貢献事業研修センター ひまわりネット」。きょうも、岡本さん、村上さんが窓口となって、笑顔で相談者を迎え、地域の人々の悩みや問題を解決する一助となり、今できる最善の行動を遂行しながら、地域の人々の暮らしを守る活動を都島友の会一丸となって展開している。

地域福祉の先を見通すことも「ひまわりネット」の使命

課後児童クラブ、さらに在宅支援（アウトリーチング）。こうした取り組みは、行政に先駆けて、都島友の会が取り組んできた活動だという。

「私たちには、自分たちができることをやろうという比嘉先生に学んだ、その思いがあります。先日、保育園にお子さんを預けているお母さんが常飲している薬を大量に飲んでしまったことがありました。この時も、家庭の状況を把握している保育園が中心になって、警察、救



「11ね！物産展」では放課後児童クラブの子どもたちが主役となって、東日本大震災の復興支援に取り組む

「11ね！物産展」や生活に役立つ多彩な講座も開催

生活支援として、看護師によるベビーマッサージ講座や、外部から講師を迎えての子育てをテーマとする講演会、消費生活上の身近なトラブルを防ぐための講座、栄養士による料理教室なども実施している。

そのなかでも、地域で注目を集めるのが「11ね！物産展」だ。この取り組みのきっかけは、都島友の会が、東日本大震災から1年たった2012年3月11日、大阪府都島区社会福祉協議会主催の被災地支援ボランティア活動に4人の職員を参加させたこと。その参加者のひとりが村上さんだった。

「残念ながら、被災地の現状から、まだまだ復興の道のりは遠いと感じまし

た。そこで、遠く離れた大阪からでも小さな応援が、明日への希望や勇気につながるのではと、東日本の物産を中心に販売し、収益金の一部を宮城県の社会福祉法人に寄付する活動を始めました」

「11ね！物産展」の名づけ親は岡本さんだ。「3月11日を忘れないように、開催日も毎月11日にして、放課後児童クラブの小学生と一緒に実施しています」

最近では「あの震災はひとごとではない」と、足を運んでくる地域の人々も増えた。また、最初の頃はおとなしかつた販売を担当する子どもたちにも、次第に「東北を自分たちも応援しているんだ！」という自覚のようなものが表れ、声も表情も生き生きしてきたという。

「1回めから手伝ってくれている子どもたちの意識が変化してきて、『11日って震災の日なんだよね。忘れちゃいけないだよ』と言ってくれるようになって、うれしいですね」（岡本さん）

大阪市立東都島小学校の小学生たちと地元企業で共同開発した桜味のラムネ「さくらムネ」や、桜あんの入ったマ